

## 藤原宮朝堂院朝庭部の調査

### —藤原宮で儀式の旗竿の跡を発見—

飛鳥藤原第 153 次調査 現場公開資料

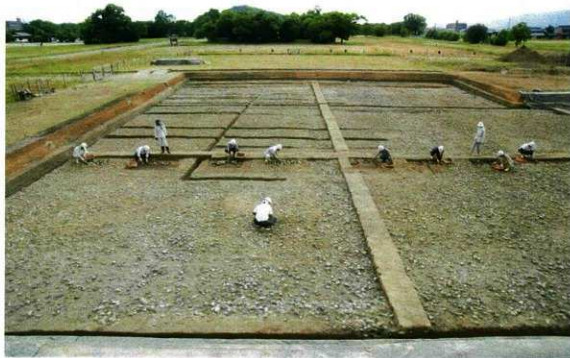
2008 年 6 月 30 日～7 月 2 日 奈良文化財研究所都城発掘調査部

今回の調査地は、藤原宮朝堂院の朝庭部です。朝堂院とは国の政治やさまざまな儀式を行う場所で、朝庭はその中央の広場です。儀式の際には、役人がこの朝庭に整列しました。これまでの調査で、朝庭部には礫を敷いて整地している状況が一部判明していました。藤原宮で朝庭部の本格的な発掘調査は今回が初めてです。

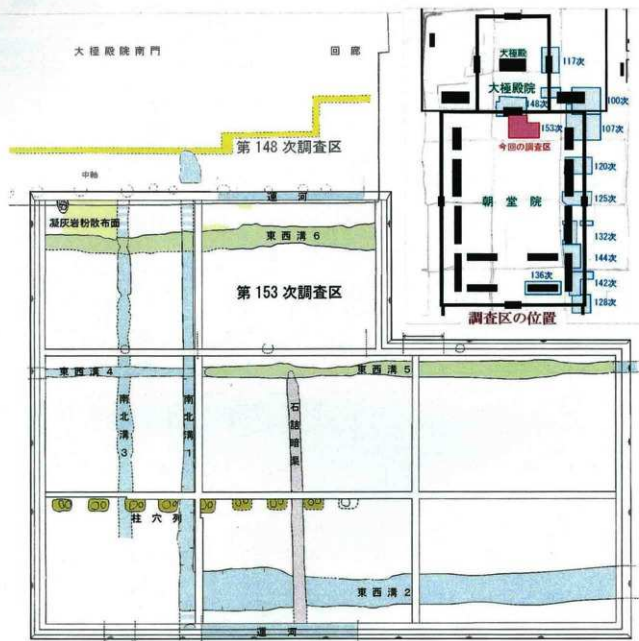
発掘調査の結果、礫敷の広場や柱穴列、溝、暗渠などが見つかりました。広場に敷いた礫は良く残っていて、1300 年前当時の姿をそのまま示すものです。北側の大極殿院南門の近辺は一段高く造成しています。礫敷広場内には、暗渠を設けて排水の工夫をしています。

調査区中央部には、東西に 3m 間隔で並ぶ柱穴列があります。8 個見つかりましたが、全部で 13 個あるものと推定できます。1 個の柱穴に柱を 2 本東西に立て並べる構造で、韓国の例からみて、2 本の柱の間に旗竿を立てたものでしょう。儀式の際には、そこに「幡」を立てたものと考えられます。宮殿遺跡では平城宮、長岡宮などに次ぐ事例ですが、その位置や本数には違いがあり、これまでの例とはまた異なった儀式の様子がうかがえます。

また、昨年の大極殿院南門の調査で確認した藤原宮造営時に資材を運んだ運河は、礫敷の下で調査区内を南北に通っていることがわかりました。これについては 7 月に降に調査を進めることとしており、詳細が判明した時点で改めて現地説明会を開催する予定です。

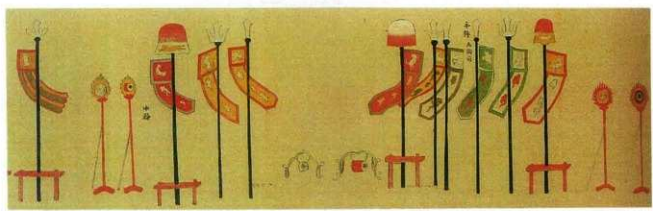


東西に並ぶ柱穴列（人が座って作業している場所）と大極殿(南から)



現在までに発見した遺構

0 10m



室町時代の絵巻に見える天皇の即位礼時に立てた幡